

一科學者の見たる日本信仰觀

前東北大學教授
工學博士

佐藤 定吉

最初に今日の講演の要旨を申上げると、先づ科學上の眞理の立場に就いて述べ、それから一般宗教への道に入り、その内特に皇國信仰と國體の本義に觸れてゆきたいと思ふ。

私の立場は根據として二つある。その一つは現代科學、今一つは世界宗教の中のキリスト教である。この二つが國體の大生命に觸れる場合どう見えるかに就いてお話ししたいと思ふのである。

第一に古典科學と現代科學の關係を申上げたい。元來科學と宗教は犬と猿との關係で今日に至つたが、その科學は古典科學であつて、現代科學と同日に論ずることは出来ない。即ち一九二五年頃から科學界に新しい光が輝いてその時から其以前の科學を古典科學（ニュートンの機械論的科學）と云ひ以後を現代科學（生命論的宇宙觀）と私たちは呼稱する。この現代科學の立場からすると分子と分母が變つたのであつて、之を理解しなければ論ずる根據を失ふのである。

現代科學に礎石を据えた人は、量子論の創設者である獨逸のマックス、プランク博士その人である。彼は今年八十三歳の高齡で、今に健在である。一日本人としての私自身が如何に「科學と宗教」を見るかを語る前に、先づプランク博士

の所信をこゝに紹介しよう。科學的世界像の奥に、靈妙なる神界の存在する事について、プランク博士は次の如く發表してゐる。

「感覺器官を通じて投影せられたものは、本來の物それ自體の相ではない。然し、その物それ自體を直接に認識する途は全く與へられてゐない。ただ此處に、物理學者の心に理解し得るものは、宇宙が合法則性を有するといふ奇蹟を體驗する。即ちこの影像と實在の世界との間には一の關聯があり、明かな結合が存在する事を體驗する」

即ち人間は、自分が工夫した測定器を用ひて測る、その測るところを五官を通じて自分の心に投影させる、それを整理し、組織立てたものが科學である。その結果は物理學者の知る事は、この天地宇宙がまるで生きものであるかのやうに、「合法則性」に動いてゐるのである。もしも天地が死せるもの、無意味に並べられてあるものであつたら、大は宇宙の運行から小は原子核内部に至るまで合法則性のもとに活動する筈があり得ない。物質科學が直面する投影像とその奥の實在の世界即ち神界との間には一つの關聯があり、明かな結合が存在してゐる。即ち靈界の實在が原因となつて、物質界の現象が生起してゐるのだとプランク博士は語るのである。この問題の中心點は、物質の本體は電子であり、電子は力であり、力の奥に生命の世界があるとの事實を私たちの理性の尺度に當て嵌めて理解し、之を確めてくれる實證の道一つを發見する事に歸するのである。

現代科學が哲學を私達に與へ、宗教に科學を與へる根據がここにある。即ちこれに依れば宇宙の實體は生命であり靈であるといふことになる。従つて靈が自己表現として物の形に現れる、即ち森羅萬象は靈の自現に外ならない。日月あらざりし先に生命の流れがあつたのである。ニュートンは因果律を以て天地宇宙の他に創造神があるとする立場に立つ

てゐた。従來のキリスト教徒の神社觀は、斯かる立場に置かれたが故に大なる誤を生じたのである。

現代科學に立てば天地の被造物が一活物なのである。従つて靈と物が二元論でなくて靈が第一存在でその顯現が物でなければならぬ。天地の靈を表現する爲に物がある。人間としても、天地の大御心を具現する爲に生き、又存在してゐるのであつて、この深い眞理が物の理解から來るのである。従つて私たちは今日までの如く人生といふのは物の量を澤山もつ所に偉大さがあるのでなくして、天地の大御心を多く現す所に偉大さがあることを知らなければならぬ。

二

「活すものは靈なり、肉は益する處なし、わが汝らに語りし言は、靈なり、生命なり」(ヨハネ傳六の六三) またヨハネ傳の冒頭には「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」とある。

即ち天地の太初に「言」があつた。といふのは神の「靈」が存したとの意である事がわかる。「靈」が最深の根源的な存在であり、この宇宙靈が波動となつて天地に漲り充満してゐるのが即ち神の「言」であつた。この「言」が生きた物の中に宿つて發動し自己表現をなしたのが私たちの言の生命であり、生命の最高表現が人の「心」であらう。即ち人の裏なる道徳律でありカント哲學の中心であるのである。

この根源たる生命が皇國に於いて何千年も續くとき生命自體が國體となるのである。私の國體といふのは君民一體、國が一人格であることを意味するのである。この第一から第四までの經過は我が古典たる古事記の冒頭に「天地初發時云々」といふ物語が最もよく説明する所であつて、上述のことを理解してはじめて正しい納得を得るものと思ふ。

三

歴史は現象である、時の流れに觸れて起伏する事實を客觀的に敘述するものであり、これは自然科學的觀方に外ならない。國體の觀方に於いてもこの様な單なる現象として見る歴史の立場は、他の諸外國の國體と比較して互に異なる處を指摘する觀方である。これはまだく皮相の見に止まる。更に私達はこの現象をあらしめてゐる深遠なる原理界に立つて國體を考へて見なければならぬ。

私達科學者にとつてこの現象の世界を因果の原理界から理解することに於て始めてはつきりした道が認められるのである。道からはづれてゐる世界を正常に置直すのが私達の云ふ發明である。私一個人の考へから申せば、昨年、天皇陛下が仰出された「萬邦をしてその所を得しめる」といふ詔勅も畏れながらこの原理と拜し奉る。

さればこの立場からすれば國體の本義を究明する私達にとつて史的日本から原理日本へと歴史を見て行かなければならない。普通に神武天皇の橿原御饗都を歴史の出發點とする立場は現象の日本からすれば當然のことといふべきであるが、其以前我が國にはなほ無限の悠遠に遡る時代が存したのである。そして文部省の「臣民の道」もこの傳統を繼いでゐるのである。

これは原理日本、信仰日本の實體からして信念でよいか、信仰の立場とすべきかの大きな分岐點に立つ問題である。何としても私は信仰の立場でなければならぬと思ふ。信念は人本主義の立場であり、信仰とは天地の神靈がかく國體をあらしめることを信じ其のあらしめる神を仰ぐのである。人にとつて信念はその根據を失ふときそが人は倒れる運命

をもつものである。信念にとつて今日の信念は昨日の信念ではないのである。然るに信仰はそれと異なる。

本の幹さへしつかりつながつてゐるならば立つてゐるといふのが信仰である。修理固成にしても、それは天つ神を念じてゐるのではなくして信仰してゐるからこそ成り立ち得るのである。どこまでも對神關係であるからどこまでも信仰である。我國體をかくあらしめてゐるのは神である。どこまでも國體の本義は信仰の立場に立つのでなければ割り切れないのである。

日本の歴史はどこまでも先祖の傳承物語ではなく、神の顯現でなければならぬ。これを信念と云ふならば宗教的信念といふべきであらう。神に對するのどうして從來まで信仰と云はず信念と云ふて來たのだらうか、それには理由があつた。信念を信仰といふと非合理的に見えるからであり信仰は不合理にも本當に思へといふ様に考へられるからである。又神社にしても國民生活の規範としての道德的意味であつて宗教でないといふ立場にある。これは政治的には賢明であるかも知れないが事實としては道德的規範だけでは國民の靈魂に眞の糧を與へる事は困難であると信ずるのである。我々は生れ乍らにして氏子であり對神の關係に生立つてゐるのである。對神の關係なれば宗教であり信仰でなければならぬ。それが眞理である。

次に國體宗教と萬教との關係であるが、日本に於ては國體宗教となるのが當然である。宗教といふときかの所謂既成宗教を照合するので異様に聞えるが、今日は宗教といふ言葉の内容を今一度整理する必要があると思ふ。既成宗教のある特定の形式を以てするとき、皇道は宗教でないと云はれるのである。

宗教とは神と人との關係を云ふのであつて、神を拜することが生活の中に生きてゐるならば、大西郷も立派な宗教生

活をしてゐると云へよう。田舎の老婆がお天道様にすまないといふのも立派な宗教なのである。我が國體は立派にこの宗教的生命の動きである。かかる意味に宗教を解して使ふとき、信教の自由はどう解釋せられるか、日本は國を一人格とした宗教國である、之れと一個人一個人の既成宗教とはどういふ態度をとるかといふことは、加藤玄智先生の『神道精義』に記されてゐる三角形とその内角の和に關する原理の比喩ではつきりすると思ふ。

神の大御心が自己表現するといふ立場からどうしても日本歴史を信仰原理の光で再検討しなければならぬ。而してこれは科學者の立場から論理整然と考へられるのである。

次に國といふ本體に就いて要點を一言申上げたい。今日まで國と一般に申すと、北は千島列島樺太から九州臺灣を申し、國家といふときは人民と土地により成立するものを指すのであるが、日本に於いては天皇即國家であり、國は領土でなく大君と臣民の魂の結合そのものが國である。一家庭にしても同様である。夫妻の生命結合が家庭の本體である。それに反するならば家庭ではなくして一下宿に外ならないのである。日本の國にあつては如何に經濟、交通、文化が進歩しても、大君と臣民との生命結合が缺けてゐるならば國家は意味をなさないのである。君民一體となるのが國體であることさへ理解出來たならば天地宇宙の生命が國體となつてゐることは納得出來るのである。この日本國體の特異なる點を細目すると第一、生命機構の相違である、諸外國は人本主義であり日本は忠孝であること正に動物と人間の相違である。第二、天地宇宙の原理を判斷するのに二つある。自然科學(古典科學)と現代科學、後者が開拓した結果は天地宇宙は一生命體であるといふのであるが、日本は現代に於いて知られたことを何千年の昔に考へて今日にまで續いて來てゐるのは何といふ不思議であらう。第三、西洋人は聖書に神の權威が宿るといふが日本の神典はヨリ以上に高い神の

權威の現れである。日本の國體が神（天）的なものであるのはここにわかる。第四、神を一番適確に表現するのは宗教である。而して佛教は印度に生れたが、それが今キリスト教と同様日本に生きてゐる。これからしても日本は神の國であるといふことが出来る。

四

皇國信仰の基本は、何としても日本神觀に立つ「天地の神」に對する信仰に歸一する。天地宇宙の實體は靈である。天地自らが一個の一大活物である。その生命の働きが「まこと」として現はれる。靈は自らを物質化して可見の形相に顯現するのが原則である。物質自身が神ではないけれども、物質は神靈顯現の一つである。そして高度の靈的顯現が、人間の靈魂である。そのうちでも、靈の顯現は神靈の受肉者たる聖者に於て最高度に達する。我らは西洋式の神人懸隔の立場に於いて神を拜しない。宇宙を神の被造物とは見ないで神の自現と見る。宇宙自らが神の身體であり、その根本靈が神である。我らは物と人とを神から切り離して見ない。神の中に物を見、物を通じて神を見る。墓碑を見るにも日本人は單に石を見ることなくしてそこに父母の靈を見るのである。正しく物心一如の實體でなくてなんであらう。我らはもろくの相に於いて唯一の天地の神を目のあたりに拜する。「一神即多神」との言葉を神道者が用ひてゐるのは、この立場を言ふのであらう。我らは歐米人と同様に「唯一神」を崇める。けれども、歐米人の如くに、この唯一神を父子と聖靈の三つに限つて了はない。我らは萬物を偶像視する偏見に陥らない。父と子と聖靈の三位一體の神をも十分に認めながら、同時に萬物の中に神靈の存在を直覺し萬物を神の宮として崇めるのである。ここに日本神觀の獨一性と優

越性ははつきりすることと思ふ。

我らは歴史的事實である神敕の背後に躍動する天地の神の意志發動を信する。これは神敕信仰である。天地造化の絶對神の神意先づ決し、然る後に神の意志が地上に顯現する。人語るに非ず、天地の神自らが歴史的に語り出でられたものゝ、夫れが神敕であると信する。この神敕によつて神の權威に觸れるのが本當であると思ふ。そして日本に於ては天皇の御言葉が神の御言葉であり權威であらせられる。ここに日本の信仰の立場があるのである。

神武天皇の詔敕にある「六合を兼ねて以て都を開く」の御一言に皇國存在の意義が最も明確に具現されてゐると我らは拜する。皇國の存在使命は此の一言にあると信仰する。之が六合開都信仰である。六合開都は八紘爲宇と表裏一體をなすものである。六合開都が成就されて後、始めて八紘爲宇が實現される。六合開都とは、天地六合を悉く神の都たらしめることである。即ち都とは神の住み給ふ場所である。萬邦萬民をして悉く神に仕へる民となさしめる事である。かくなりて始めて全人類各々その所を得るのである。換言すれば「皇國の存在は、全世界神國化の爲めである」との信仰に立つのが我國であり、この詔敕も神の御命令が神武天皇を通して國民全體に宣られてゐる所に信仰の意義があるのである。従つて天佑信仰といふのもこの神の使命に生きる時に天佑があり、神の聖志具現の爲であるならば、萬難を排し全力を盡して神意に奉行しまつる。この時、神の力は地に和し、神の佑は皇國に降る。

さういふ尊い神の眞を見る所に自然身を清めることをしなければならぬ。即ち禊信仰である。キリスト教の清めの信仰もこの禊信仰の一端として許される。

キリスト教と皇國信仰との關係の詳細に就いては、後日の機會に譲る心算である。